

2024年9月

課題本 『広島へのさまざまな旅』

大江健三郎/著

集団読書テキスト

1985年

◆◆◆9月の読書会から

先月の読書会の振り返りから始まりました。参加者が選んだ本を読んで感じたこと、感想文から感じたことをみんなで共有しました。7月の課題本は感想文としてまとめることは難しかったかもしれないけれど、家族がテーマの課題本だったのでそれぞれの思いがあり再度盛り上がりました。

今月の課題本は集団読書テキスト『広島へのさまざまな旅』、大江健三郎の『ヒロシマ・ノート』(岩波書店・1965年)の7章です。

(文責:森下)

竹原読書会 『広島へのさまざまな旅』 大江健三郎 全国学校図書館協議会

吉川五百枝

課題本『広島へのさまざまな旅』(著大江健三郎)を読んだのは、9月11日。23年前アメリカ中枢同時テロのあった日だった。

私が例会の中で話したかったのは、「広島」と「ヒロシマ」の違いである。『広島へのさまざまな旅』は、集団読書用の本なので、元々の『ヒロシマ・ノート』から編集してある。その『ヒロシマ・ノート』という「ヒロシマ」は、広島県という特定の地名だけにはおさまらないと思うのだ。

「広島」が、日本国広島県という実在の名前であるのに対して、カタカナで表記する「ヒロシマ」は、国境も県境も持たず、地図にもない。どこにも存在しない。だからこそ、どこでも、どんな形ででも在り得るのだ。

「ヒロシマ」は、もちろん「現実の原爆被害の広島と長崎」が基調にあるが、原子爆弾を落とされるという経験から発する総てのことを含んで「ヒロシマ」は実在する。大江さんは言うく **「僕自身の反省のために、この『ヒロシマ・ノート』を書いてきた」と**。

この本の最初の頁に、彼が何のためにこの本を記したかをまず述べている。

彼は「広島」訪問によって **「人間の悲惨と威厳について切実な反省を強いられないではいられない体験」**をしたからだと記す。「人間の悲惨」そして「人間の威厳」。全編そのことを書くのだと鮮明にしている。

「人間の悲惨」について

1945年7月、アメリカのマンハッタン計画で、核融合の実験に成功した時、それからの事も忘れてカンパイした人々の心の悲惨。

1945年8月6日、広島県広島市の上空に飛来したB29は、(私は、B29が襲ってくる音を知っている)人類がこれまで知らなかった殺戮の方法で殺人を犯した。原子爆弾の発射スイッチを推す軍人に繋がる人々は、その後どれほどの悲惨をもたらしたか、想像することが出来なかった人間としての悲惨。

大江さんは、こう書く「もし広島ではなく、ボストンに原爆を投下するとしたらアメリカ人は認めなかっただろう。しかし、日本なら、どこでも良かった。早く戦争を終わらせ、多くの命を救ったと言う意見に賛成できるのだ。同種にはやさしく、異種には残酷になれる。アメリカ人だからという特有の人種の性ではなく、人間という種の悲惨である」。

「広島」でいかなる事がおきたのか、どんな文章も、写真も、ほんの一部しか表現できない。正確なことを知り得ない人間という種の悲惨。

〈あからさまな原爆の悲惨の中心になっている原爆病院。〉

〈やっとの事で生きながらえた子供が十代で白血病を発症。原爆による理不尽な不意の襲撃を理解できない4才児の20年後、国家の責任を自らの肉体に於いて引き受けた。1つの国の国民であると言うことは陰惨であるかもしれない〉一方で、〈広島の外では、具体的な悲惨をわれわれは忘れていることが出来る〉。これもヒトであることの悲惨

大江さんは、自分の反省として書き綴ってきた。

原爆がもたらしたのは、描ききれない「広島の地の悲惨」だけでは無く、「人間の悲惨」と呼ぶしかない「ヒト科」の奥底の哀しみと痛みを文章に起こしている。私も、1941年、日本が争いを拡大した年に「ヒト科」に加わった一人だ。

「人間の威厳」について

大江さんは、「威厳」と使われる。「威」とは、他を寄せ付けない厳しさを感じる。「人間の悲惨」を冷静に意識すると共に、他からの評価を許さない個人の屹立する本質を示されている漢字だと受け止めた。

「悲惨」の深さに呼応する「威厳」の高みだろうか。

広島で被爆し、〈白血病患者の最悪の苦しみの果てに死を迎える〉ことになる青年は、〈愛し合う婚約者とともに、はたらくことなくにせの生涯をおくるべく慣らされた人生〉を選ばなかった。最後の2年間、〈彼は、敢然として人間らしく生活し、社会的存在である事を主張し、印刷会社に就職した〉という姿を、「人間の威厳」として大江さんは捉えた。婚約していた娘は、〈この被爆青年の運命に参加した〉と大江さんが表現する自死を選んだ。彼女は、どんな他からの評価も受け取りはしないだろう。

〈被爆者たちの克己心に寄りかかって、自分たちの甘い良心を無傷に保つ事ができたのも忘れてはならない〉この文を読みながら、私もうなだれるしかない。

そして、大江さんの言葉を重く受け止めた翌12日のことだ。中国新聞の社会面に「原爆もテロも変わらぬ痛み」という大きな表題で、原爆だけではない社会構造(ヒトの営み)の問題を示す報道が載せられた。

ニューヨーク州立博物館の常設展示には、2001年9月米貿易センタービル2棟などのテロ関連資料があるそうだが、そこに、広島の被爆で亡くなった佐々木禎子さんの折鶴が常設展示として加わったというニュースだ。原爆でも、テロでも、「愛する人を一瞬で奪われた痛

みは同じではないか」という禎子さんの甥の言葉が続いている。大江さんの「ヒロシマ」は、このことではないか。

「広島」の悲惨が、「ヒロシマ」と記されたとき、点(特殊)から面(社会全体)に捉え直される。

しかし、だからと言って、「広島」の悲惨が薄められるわけではない。現実の悲惨な体験が、世界の非核化を目指す基本の砦である事には変わりはない。「広島」と言う「点」が「ヒロシマ」という名の「面」を支え、導く。

大江さんの独特の文体は、そのまま引用するしかないが、「ヒロシマ」への思いは、引用ではなく、読み手一人一人のものになるだろう。

『広島へのさまざまな旅』を読んで

◆ 【 YA 】

警告も何もかも無しで広島に原爆が投下され 79 年経った今も、病床に伏して放射能と闘う被爆者。去年一年間に亡くなった方は広島での被爆者で 5,079 人。原爆は快復不能な人間の悲惨以外の何ものでも無い。

大江健三郎は 16 歳の時、被爆詩人原民喜の文学や詩に感銘を受け、自殺した原民喜の被爆者としての苦しみに気持ちが揺らぎ、「私の文学の原点である」と述べている。又、大学時代 23 歳の時芥川賞を受賞している。

1960 年 25 歳の時、大江健三郎は初めて広島を訪れた。中国新聞に寄せた「僕は今日、広島を訪れて原爆記念祭に出席した。それは僕にとって貴重な体験である。いますでにそれを感じる。この体験のおもみはしだいに大きくなり、僕を深く深く支配するであろう。・・・中略・・・広島は僕にとってもっとも重くもっとも支配的な存在となった。」

1963 年 8 月原水爆禁止大会を取材し、原爆病院の医師や被爆者に取材している。後に「ヒロシマ・ノート」を出したが、その冒頭にこう書き始めている。「このような本を個人的な話から書き始めるのは妥当ではないかも知れない。僕については自分の最初の子が瀕死の状態でもガラス箱に横たわったまま、回復のみこみはまったくない始末であった。」この私生活の苦しい中での取材で、彼は悲惨な体験をした広島の人々の生き方から励ましを受ける。

そしてこう続ける。「まさに広島の人間らしい人々の生き方と思想とに深い印象をうけていた。僕は直接かれらに勇気づけられたし、逆にいま僕自身がガラス箱のなかの自分の息子との相関において落ちこみつつある一種の神経症の種子、頽廢の根を深奥からえぐり出される痛みの感覚をも味わっていた。そして僕は、広島とこれらの真に広島のなるヤスリとして自分自身の内部の硬度を点検してみたいとねがいはじめたのである。」

障害を持つ子供との共生という個人的な問題と世界規模の状況という、一見対極的な二つの問題は大江健三郎にとって当初から繋がりをもつものである。

続いて「一週間後広島を発つとき、自分自身が落ち込んでいる憂うつさの穴ぼこから確実な快復にむかってよじのぼるべき手がかりを自分の手がしっかりつかんでいることに気づいた。そしてそれは直截にわれわれが真に広島的人間たる特質をそなえた人々に出会ったことのみ由来していたのであった。」

その後くり返し広島を訪れ、広島で体験したことを一連のエッセイとして書いたのが「ヒロシマ・ノート」である。「広島への次つぎの旅ごとに新しく、真に広島的な人々にめぐり会った。それは僕にもっともめざましい感銘をもたらした。」と。

「ヒロシマ・ノート」はプロローグ、エピローグそして七章からなっている。プロローグ「広島へ、」I「広島への最初の旅」II「広島再訪」III「モラリストの広島」IV「人間の尊厳について」V「屈服しない人々」VI「ひとりの正統的な人間」VII「広島へのさまざまな旅」エピローグ「広島から・・・」

となり、今月の課題本は第7章のものである。

被爆者そして彼らの治療に当る医師たちの生きざまは真からの感銘を受ける。「ヒロシマ・ノート」は常に原爆被災地広島を示すだけでなく、広島、長崎をおそった今世紀最悪の「人間的悲惨」を象徴し、反核の意志「ノーモア・ヒロシマ」を含意するとある。

「広島へのさまざまな旅」の取材は、投下から僅か20年後、それから現在までの状況は著しく変わっているが、核の恐ろしさはそれ以上のものとなっている。

又「原水爆被災白書」を実現する具体策の問題が提起されている。「アウシュヴィッツのナチス・ドイツによるユダヤ人虐殺の実態は世界的に広く知られている。しかし広島はアウシュヴィッツをこえるほどの人間的悲惨でありながら、しかもふたたびそのような悲惨の結果する危険が現にありながら、決して十分に知られているというわけにはゆかない。」このような危機感からきっちりとした白書が必要とされる。

中国新聞の論説委員の金井さんが提起した白書で「原爆は威力として知られたか、人間的悲惨として知られたか。」。核兵器を威力でなく人間にもたらす悲惨としてとらえ考える。日本の進む方向性がそこにあると思ひ、金井さんの「原水爆被災白書」にも賛同している。

核と人類は共存できぬと理解していても、科学者は作り続け、今や世界9ヶ国の核保有国が持つ核弾頭は1万2120発になったと長崎大核兵器廃絶センターが発表した。核兵器を禁止する国際条約が2021年1月22日発効したが、日本は未だに批准していない。

大江健三郎が度々広島で取材している中で、原爆病院院長重藤博士は政治的なことを語られることはなかったが「世界の強国が核兵器をもって勝ちほこるにしても、それは長い歴史の上で、かれらの国の決定的な汚点となるであろうこと、日本にこの汚点を絶対許容しない志をもった政治家があらわれて、核兵器を保有せず、それに反対する国家としての首尾をまっとうしてくれることを希望する。」と、直接政治に言及されたと述懐している。

又、エピローグの最後に語っている「僕は、重藤原爆病院院長をはじめとする、真に広島思想を体現する人々、決して絶望せず、しかも決して過度の希望をもたず、いかなる状況においても屈服しないで、日々の仕事をつづけている人々、僕が最も正統的な原爆後の日本人とみなす人々に連帯したいと考えているのである。」(1965年1月～5月)

◆ 【 KT 】

今回朝ドラで原爆裁判で話題になっていたのがタイムリーな本でした。

広島県に育っていると子供の頃から学校で原爆の話聞いていますので、また？いつも

聞いているから。と構えていましたが、この読書会で資料とかをおしえてもらっているとなんと1963年に佐々木旅館で原爆の会議が開かれて湯川さんまで来ていたとのこと。びっくりしました。筆者はノーベル文学賞まで受けた人でまたびっくりでした。的場に広大の物理学研究所があった関係なのでしょう。京都国際会議ですのような会議だったそうです。

原爆は悲惨過ぎて語るのがつらくなってしまいます。

軍も天皇も戦争をやめるつもりで2ヶ月前から会議をしていたのにうやむやになって二回も原爆が落ちました。しかも二回目は広島よりも威力の大きいものだったとか。

ひとえに権力とか軍のプライドの優先だったと思います。日本の主張は原爆の方法が悪いと主張してきました。

それは朝ドラでも描かれています。

私個人としてもそう思います。日本が中国とかアジアでひどいことをしてきたことの反省をあまり語らないことは残念です。

もうひとつ戦争が終わっても差別、偏見、結婚生活までずーっと影響を与え生き残った人の人生に影響を与えていました。この事も残念です。

家族を失い、孤児になったり生きていくのが精一杯でした。

今回また原爆についての新しい発見があり良かったです。

◆【 JM 】

この本は著者の「ヒロシマ・ノート」の第7章だそうだが、「ヒロシマ・ノート」を読んでいないので全体がつかめないのが残念である。必ず読みます！

本書を読んで、「戦争や原爆は完全に“悪”であり、人間の尊厳を奪うもので、この実態を広く知らしめなければならない」という著者の考えには共感する。

各国の指導者に広島平和記念資料館に是非来てもらいたいと思うのは、被爆者の実態を知り、被爆者の遺品を通して追体験してほしいからだ。昨年のG7広島サミットのような一部分の見学ではなく、時間をとって、被爆地・被爆者に寄り添ってほしい。著者がこうして発信、提起してくれたことに感謝する。

しかし、読んでどうしても気になったことがある。被爆者の婚約者の死後、後追い自殺をした女性について書かれた部分である。「断固たる覚悟」「敢然として婚約者の死を認めないで自殺した決意」「原爆症で死ぬ青年に対してなしうる最大限のことをした」「徹底的なひとつの運命の選択」「威厳ある死」とある。美化し過ぎなのではないか。死にたいほど辛い・・・というのは理解できる。でも、死んじゃダメですよ。

この本のあまりの薄さに奥付を見たら「集団テキスト」で「全国SLA 集団テキスト委員会編」とある。SLAとはSchool Library Associationの略で、中学、高校の集団読書用らしい。生きていくことは辛い。でも、「死」という選択はしてほしくない。青少年の集団読書にこの章はいかがなものか。

私が子どもの頃、広島では夏休みの登校日は8月4日か5日だったように思う。それは、8月6日は鎮魂の日で、身内を亡くした人にとっては命日だからだろう。それが今は8月6日

を登校日にしている学校が多いようだ。そのことから戦争が遠くなったことを感じる。年月が経っても風化させてはいけなく強く思う。

◆【 T 】

親しくお付き合いさせてもらっていた年配の方から、「原爆手帳を持っているんよ。高等女学校の時に被爆したんよ。」と話を聞いたことや近所のお年寄りから、「原爆投下後、家族を探しに広島に行った。たくさん亡くなった人たちの中を探してまわった。その時の様子は、とても話せるようなものではなかった。」など私たちは原爆のことを経験された方から当時の話を直接聞くことができたが、戦後 79 年を迎え、これからは、戦争を経験された方から直接話を聞くことはだんだん難しくなっていく。悲惨な戦争を二度と起こさないようにするため、経験された方々が残されている言葉や書き物などに真摯に向き合い、私たちにできることは何かを考えていかななくてはならないと思う。

日本は、1955 年(S35)頃から高度成長期に入り、生活水準が向上し、物質的に豊かになってきた。しかし、被爆者の救済は十分ではなかった。

被爆した一人の青年の死、作者は、「最も深く、にがい絶望をまのあたりにした…しかし、屈服せず、ストイックに、最期まで威厳とともに生き、沈黙して威厳ある死を選んだのであった。」と記している。急な発症、死を見つめながらの二年間を考えると、やりきれなかったであろう彼の気持ち、残された生と向き合い生き抜いた彼の人生について深く考えさせられた。

村戸さんは、顔にケロイドが残り、《失われた美》を取り戻すため何度も手術を受けたが回復されることはなかった。彼女は、第一回原水禁世界大会で、「苦しんでいるのは自分だけではない。」と発見し、平和運動に参加していった。しかし、声を上げることができない被爆者もたくさんいた。

平和運動の参加者たちの意思是、《自分たちの味わっている苦しみを、他の人間たちに味あわせてはならない》ということだった。

1945 年に原爆が投下され、その 20 年後の 1965 年にこの本が出版された。再び戦争を起こしてはいけなくという強い思いで書かれたと思うが、現在世界を見渡せば戦争をしている国々があり戦争の危機はより身近に迫っているのではないだろうか。2024 年は戦後 79 年になるが、現在を次に起こる戦争の戦前にしてはいけなく。

◆【 N2 】

7 月、8 月の読書会で家庭とは、家族とは何かを考えてみると、定義するのがとても難しかったのですが、縛って束にされたアスパラガスの縛りが家庭であるという説明に納得しました。アスパラガスを縛るのが家族、縛られても良いと思う関係、何を言っても見捨てられない安心感のある関係、束が解かれても各々の個性が尊重され自立していること、なるほどと思いました。

広島県外で育った者にとって、広島、長崎の原爆被害は、本やテレビで見るだけでなかなか実感することが出来ませんでした。しかし修学旅行で初めて原爆資料館を訪ね、蠟人形や遺品の惨状を見たときの恐ろしさは今でも忘れられません。長崎でしばらく暮らしたときに、10 フィートフィルム運動をテレビで知りました。これは米国戦略爆撃調査団が被爆直後の長崎、広島を撮影した8万5000フィートのフィルムを米公文書館で保存しており、これを市民ひとり3000円の募金で10フィートずつ買い取るという市民運動の募金活動のテレビ放送でした。その後ここ広島に住んで、大久野島の毒ガス被害者の話を聞く機会を得たり、原爆被害に遭われた方と知り合いになり、「四歳の時に中心地近くで被爆して頬に刺さったガラス片が一昨年出てきた」ことや、「病院通いを続けていて、身体のいくつかの部分を癌で無くし、いつ死ぬのかと思いつつながら八十年近く生きてる」などと話されるのを聞いて、自分の隣に座っている人の日常生活の中に被爆体験があるのだと知り驚きました。しかし「経験していない人に軽々と原爆被害を作品の題材にしてほしくない」と静かにはっきりと言われた時にはどう返事したら良いのか解りませんでした。惨状は原爆が落とされたその一日で終わることなく今も続いていることを、そしてその方々の気持ちを理解しようとしても到底理解し得ないのだと思知らされました。

「自分たちの味わっている苦しみを、他の人間たちに味わわせてはならない。」

自分たちは今なお被害を受け続けながらも、後の人々を思いやる優しさの中に決然とした意思を表す言葉を口にされる方々にさらに尊敬の念が深まりました。

◆ 【 KH 】

読書会でも発言した通り、九州生まれの私にとって、“原爆”といえば長崎。歴史として、8月6日が広島、9日が長崎に原子爆弾が落とされたことは知っていても。

広島に嫁いできて、知らなかった広島の本当に様々な悲惨を知った。

広島街に入り、原爆ドーム近くの川辺に行くと、たくさんの亡くなった方の気配を感じていたたまれなくなる。。という人の言葉。父や母、叔父など本当に近い人をあの日に亡くされた方々が自分のすぐそばにおられる事実。

それらを全て、外から眺める、外から心を痛めるしかないのも、事実。

広島街の悲惨をヒロシマの“悲惨”と表現した時に世界人類に核兵器の全廃を訴えるべく、普遍性が生まれると。

(ニュアンスがずれていたらすみません)大江さんは、そこを伝えたかったのではないかと吉川先生が発言された。

論点がずれるかもしれないが、数年前に丸木位里、俊さんの原爆の図美術館を訪れた時もちろん、展示されている作品の一つひとつが身に迫る迫力で、真夏というのに、なぜか寒気がしてきて、(本当に震えが止まらなくなり)引き上げたのだった。この美術館の一番下

の展示室には、アウシュビッツの惨状を描いた作品も、南京大虐殺の作品も展示されていた。水俣病の図も、沖縄戦の図も。人間が人間に対して行った、信じがたい過去の悲惨。今もなお世界のあちこちで、繰り返されている悲惨の数々。

「ピカは人が落とさなきゃ落ちてこん」という、丸木さんがよく引用された言葉は、本当に本当にその通りだと深く思うのだが、では私はどうすればいいのか。。

人が、人に対して行う殺戮。絶対あってはならないのに止める術を持たない自分。この本を読んでも、考え込むしかない。些細でありながら、当人(自分)にとっては甚大な困りごとに翻弄されながら、大切な考え事は日常に飲み込まれてしまうばかりなのだ。

数日前の、テレビ番組で偶然、ある一人の男の子を追ったドキュメンタリーを見た。その子は、9歳。自分がかつてアメリカのニューヨークのビル100階で仕事をしていたと自らの前世を語るのだという。そう、9・11の事件が誰も頭をもよぎる。他にも幼少から見せる数々のこだわり。教えもしない英会話をこなし、サングラスや洋服の好み。音楽の好みまで、9歳の少年とは思えない。ついに転生を研究している日本人の研究者とともに、ニューヨークに渡り、検証した。驚くべきことに、9・11の犠牲者名簿から10数名の気になる名前をピックアップ。その1人が、過去の自分かもしれないと。番組は、その人の姉をたずねる場面を映し出した。目の前の少年(遠い日本からやって来た)と、あまりに酷似した亡き弟の好み。彼女は『私はキリスト教徒だから、この事実を認めるわけにいかないけれど、こんなこともあるんだ。何より弟がこういう形で、同じ地球に生きていることを感じられて嬉しいと、涙を流した。輪廻転生それは仏教の国で育った私達には、程度の差こそあれ、受け入れる余地は随分あるように思った。9歳の少年はこれから先、どんな道を選び成長して行くのかなと、心が少し明るくなった。

ヒロシマの悲惨が、ニューヨークの悲惨、ウクライナの悲惨、パレスチナの悲惨 数限りなく悲しいことに起こり続ける悲惨へ。

どんなに些細な日常の悲しみ・苦しみでさえ、自分ごとにするのは難しい。まして世界の平和。

人というのはつくづく勝手に、どうしようもない生き物だなと思うばかり。

◆【 望月悦子 】

今回の課題本は「ヒロシマノート」(1965 昭和 40 年出版)の中、プロローグ・エピローグを合わせた 7 章めに掲載されていることが、担当者の準備してくださった資料によって知ることができました。

「プロローグ 広島へ・・・」「Ⅰ 広島への最初の旅」「Ⅱ 広島再訪」「Ⅲ モラルリストの広島」「Ⅶ 広島へのさまざまな旅」「エピローグ 広島へ・・・」この漢字で書かれた広島は日本国広島県のことで、原爆の落とされた場所であって、「ヒロシマノート」のヒロシマとは違うのだと、

例会で吉川講師はおっしゃった。目から鱗が落ちるとはこのことかと思えました。課題本の冒頭「広島への僕のかずかずの旅が全てそうであったように、僕は人間の悲惨と威厳について切実な反省を強いられないではない体験をした。僕にとって広島へのさまざまな旅はすべて一貫して、そのような旅であった(P3)」人間の悲惨と威厳この言葉こそが著者が伝えたい内容だと指摘されました。「人間の悲惨と威厳」の体験は、年と共に忘れやすいし、世界の別の場所のあちこちでは同じようなことが起こっています。ウクライナ、ガザ地区然り。4歳の時被爆した青年が白血病と闘いながら、原爆病院の先生方の努力によって2年間の夏休みを経て24歳でなくなっています。「病院を訪れた高貴な方が『2年間の夏休み』を休養させず働かせたこと」に怒りを感じていますが、そうだろうか。私は病院の先生方と同じく人間の威厳(尊厳)を第一に考えて、青春の愛を体験している2人の生涯を終えることができたことに喜びを感じました。「人間らしく生活し、社会的存在たることを希望して」印刷会社で働けるよう努力なされた病院の先生方に敬服しました。例会で彼の恋人である20歳の彼女が後追い自殺したことを美談のように取り上げることに違和感を覚えたという意見がありましたが、その意見に「はて？」と立ち止まり考えてみました。人間の威厳・尊厳から考えてみると、恋愛を謳歌している2人には死をもって完成させたかったのかもしれないし、その方法しか考えられなかったのではないだろうか。戦争が無ければ、原爆が落とされなければこんな理不尽な現実はある得なかったのに。ずうっと2人の恋愛は続いていたはずなのにと感じてならない。「重藤院長は、どのように暗く苦い心で、この若い死者を見送られたことであつたか。しかし、これはなお連続してゆくはずの悲惨の河のなかばの数知れぬ水死者たちの一人の死なのである(P4)」原爆体験者の一人一人の現実を想像するのに生きるのも地獄なら死ぬのも地獄と思えてならない。原爆体験者の一人一人の現実はみな違うはず。症状の重い軽いでは測られないのではないか。私の父も鹿児島から出張帰りに原爆に会い、己斐駅からどこまでどのように何時歩いて三原まで帰ったのか知らないのですが、この話は禁断の実の如く我が家では触れられないことになっていたように思います。父は見たこと・感じたことを話せなかったのか話したくなかったのかわからないまま1996(平成8)年9月に亡くなりました。父は寝込むことはなかったけれど腎臓病で病院とは縁が切れない生活をしていました。京都生まれの京都育ちの父は、漬物が好物でよく先生に叱られていたことを思い出します。昭和21年生まれの妹は体内被曝で、父と同じように腎臓病で病院と縁が切れない生活をしていました。昭和18年生まれの私はいたって元気で過ごせているというのに。原子爆弾の恐ろしさを痛感します。

また、著者は「原爆を投下したアメリカの軍事責任者たちが、広島市民の自己回復力、あるいは自らを悲惨のうちに停滞させておかない、自立した人間のれんち心(心が清く、恥を知る気持ちがあること)とでもいべきものに寄りかかって。原爆の災害にたかをくくることができたのであろうことを僕は度々考える(P12)」と絶望しながらもなお屈伏しない被爆者たちの克己心に寄りかかっていることを人類一般は忘れてはならないと力説しています。

P13の事例には、「ご迷惑をかけました。私は予定通り死んでいきます。と遺書を残して広島19歳の娘が自殺した。特別被曝者手帳を持ちながら生活面の支えがない業苦と貧を背負わされた若い命は精も根も尽き果てた感じ」さらに、「日本の消費生活繁栄の時代の筑豊炭田では、政治的かつ社会的のひずみと欠陥の極北である筑豊に、広島から追い立てら

れるようにして移り住んできた多くの人々がいること。被曝によって家族を失い最底辺の職業について女性たち「被曝によるケロイドで《失われた美》を取りもどすために何度も手術を繰り返したが回復することはなかった。家に引きこもりじっと沈黙して暮らしながらもケロイドをもった数多くの娘たちの一人として生きるべき前途を考えるのにいたった村戸由子さん(市内の個院の事務員として働く若い被爆者)」などの実話を通して著者は「失われた過去への指向と、それに続く絶望の時は人間を最も神経症的な深みに、近づけるものであろう。このような危機的な状態の人は広島に数多くいたに違いない」という視点から、村戸さんの回心を見つめています。「彼女は、原水禁世界大会の第一回目の集会で『苦しんでいるのは自分だけではない』という基本的にして本質的な発見をしている。この大会が被爆者に人間的な自己回復の契機を与え、同時に日本と世界の平和運動家たちの志に一つの方向をあたえるものだった」と指摘しています。村戸さんはこの大会を契機に神経症的な状態から回心し、現実と未来に関わるようになったそうです。かつて「原爆乙女」と呼ばれた彼女たちは、現在も自分の顔をゆがめるケロイドへの嫌悪、羞恥心を克服し、壇上に上がり運動にかかわっていることを忘れてはいけなとも力説しています。原爆病院の重藤院長が、村戸さんとともに語った言葉「自分たちの味わった苦しみを、他の人間たちに味わわせてはならない」と。この思いが、平和記念碑「安らかに眠ってください。過ちは繰り返しません」につながっているのだろうか。

被爆者たちの地獄のような生活を知れば知るほどに、彼らの壮絶なる克己心に甘えてはおれない現実を忘れてはいけなともしか言いようがありません。私は、その都度部分的にニュースで原爆のことを知ってはいましたが、本気で向き合い考えたことはありませんでした。戦争による悲惨さはアウシュヴィッツも広島も同じであるはずなのに、前者ほど世界的には受け止められていないように思います。「広島で行われたことの人間的悲惨の実態は、広く正確に知られねばならない(P19)」戦後被爆者も高齢化し、次の世代につなげていかなければならなくなっているとき、広く正確に継承していく方法を私たちに託されていることを真摯に受け止めなければならなとも切望しました。

◆【 MM 】

『広島へのさまざまな旅』を読んで、原爆後自殺を選んだ人がこんなに多いのかと絶望した。原爆による白血病で死んだ婚約者の後を追う人、胎内で被曝し、生まれた後の原爆症に苦しんで自殺した若者。原爆による病だけではなく、原爆に遭ったことによる差別もあった。兵器を作るのも人、うわさや偏見で人をみるのも人…。人間が一番怖いな、と改めて思った。

課題本の中で書かれた自殺に対しての賛美には違和感を感じた。褒められる自殺は私には理解できない。自殺についてのプラスのイメージを植え付けてつけてほしくない。自分で死を選んだという事実だけがあるのみだ。

広島の悲劇は過去のものではない、というけれど課題テキストを読んで感じたのは広島と著者の距離だ。聞きなれない言葉と長めの文章で語られるにつれ冷めていった。著者と広島の距離を感じると同時に、私も広島を見てきたか？と問う気持ちになった。広島県に住ん

でいて、広島を知ろうとしたか？原爆や戦争については読書会つながりで考える機会が定期的にあってありがたい。課題本から派生して関連の本を読むことはある。しかしテレビで特集番組があっても私は気になるプログラムでなければ積極的に見ることはあまりない。悲惨なことから目を背けているのだと思う。本だと読めるけれど、映像だと訴えてくるものが大きすぎて受け止めきれない。しかしそれほどのことがあったのが戦争なのだ、避けてはいけない。

読書会で出た大久野島についても、毒ガス工場があったことは図書館で仕事をして初めて知った。大久野島で平和ガイドの説明を聞き、本当に驚いた。身近にこういうところがあって、実際に使われた建物を何か所も見られたのは貴重な経験だ。このことがきっかけで大久野島で毒ガスに関わった学徒についての本を買った。挿絵が生き生きしていて、子どもでも理解しやすく、手元に残して伝えたいと思える本だ。今月の資料でも『ヒロシマ・ノート』の挿絵カットについて触れていて、モノクロで小さいカットでも訴えてくるものがあった。カットに添えられている説明文を読むとさらに震える。「死体の間を、生きた鯉が泳ぐ」「足だけ二本、コンクリートの路の上にはりついてつつ立っている」…。

読書会の時には紹介できなかったが、一冊の絵本を持って行っていた。『風が吹くとき』（レイモンド・ブリッグズ作 さくまゆみこ訳 あすなろ書房 1998）、ふつうの人たちが犠牲になる核戦争の脅威を描いた本です。漫画のようなコマ割りで描かれています。ラジオで核が落ちてくると聞いたけど、どうしたらいいの？田舎に住む夫婦は政府の手引書にあるようにシェルターを自分たちで作ったり、じゃがいもの袋をかぶったりできる範囲の急ごしらえで用意して避難したものの、だんだん髪がぬけたり下血したりと影響が出てくる。ほのぼのとした絵のタッチのまま進むが、色使いが少しずつ変わり二人の顔色が悪くなったり背景も徐々に色を失い最後は真っ暗の中の二人の会話で終わる。助けを待っている彼らに救援隊はくるのか、来たとしてもそれまで生きていられるのか。政府が言うことは本当なのか…読み手に考えさせる本だった。約30年前の本だが、今読んでも訴えてくるものがある。核兵器が使用されることがあってはならない。政府がいうことをうのみにせず自分で考える必要がある。過去の悲劇を忘れてはいけない。